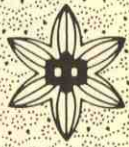


くまざ



色々な事がふりかゝるから 人生遣りがいがある

湖陵同窓会長 久本 甫

昨年は二阡年紀だの世紀末だのと随分騒がれましたが、あれから早くも半年以上が過ぎ、ちか頃では全く耳にしなくなりまして。しかしこの二つの時代に生きた我々は、洵に稀有なる経験をした事になると云うことになるのでしょうか。世紀末と云う言葉は精神上や芸術上で兎や角く云われ、画家のクリムトやその弟子のエゴンシーレなどで我々もよく知るところです。あの妖しい得体の知れない絵は、一度見た者には眼に焼き付き忘れようにも忘れられずに居るか虜になるかのどちらかになるのでしょうか。十九世紀の世紀末の事は高階秀爾や辻邦生の専門家に任せるとして、此の度の世紀末はどうでしょう。デカダンスなんてそんな格好よいものでなくて『キルカキレルか十七才』なんかも世紀末かも知れませんが。有珠や三宅島の噴火も正に世紀末の現象かも知れません。さらには第二次森内閣は世紀末内閣だなんて云ったら不謹慎だと云われますかな。それにしても我が同窓会も、やり残した事業を完遂して、同窓会消滅だなん

て云う様な世紀末だけは迎えないよう、卒業生全員が頑張ろうではありませんか。

我等が母校、釧中・湖陵も再来年は開校九十周年を迎えます。既に準備委員会も組織されているようです。平成三年の八十周年記念の時は未だパブルの時代でしたので、色々な事業が進め易かったことを記憶しておりますが、此の度は大変な時代を迎えての周年事業であります。我々卒業生はお世話になった母校への恩返しと考へ、一人一人が何等かのかたちで協力する必要がある事は誰れでも感じているところでしょう。

資料を紐解くと湖陵同窓会は昭和七年八月一日に創立されています。当時は釧中同窓会です。爾来第二次大戦中から戦後の一時期を除いて七十年近く卒業生間の親睦と団結を守り続けて来ました。この間の先輩同窓生には頭が下がる思いがします。今、同窓会館の蹟まで同窓会そのものが兎や角云われておりますが、皆が力を合せば何の其の『遣れば出来る』です。今世紀最後の同窓会を楽しく有意義に ビールで乾杯!!



続『絆』

校長 中村 暁三

五月下旬から六月上旬にかけて、例年のように、三十人ほどの教育実習生が母校で実習し、無事終了しました。全員同窓生です。僅か二週間という短期間でしたが、涙と笑いの交錯する充実した時間を過ごすことができたようです。

終了後の感想には、「これまで生きてきた中で最も充実してました」「こんなにも幅の広い大変な仕事だったのか」などであり、授業の厳しさ、教師の守備範囲の広さを、少しは理解できた様子を感じられました。

「いずれは、母校の教壇に立ちたい」と願っている人が多いことを知り、強い「絆」を感じ、少しのエネルギーを送りました。狭き門、教員採用一次二次試験を無事突破できるような心から祈ります。

六月二十三日、鈴木副会長さんと共に札幌湖陵会の総会・懇親会に出席しました。会は湖陵三十二期、若さ溢れる佐川会長のもと、

和やかな雰囲気終始し、楽しく過ごさせていただきました。始めの校歌斉唱、終わりの応援歌斉唱に感じた参加二百二十七名の固い「絆」が、釧中二十二期、新井さんの高らかなリードによる万歳三唱に乗り、全国、全世界すべての同窓生へと届いたように思われました。

同窓の「絆」に栄光あれ！
母校は平成十四年に九十周年を迎えます。「今後一層の充実発展を目指すために、節目節目を大切にしたい」と考えられた同窓会、後援会、PTAの会長さんをはじめ役員の方々が中心となり、記念の事業が計画されつつあります。

今年の後援会長さんを委員長とする準備委員会を発足し、来年、協賛会を設立する予定です。札幌湖陵会でもお願いしてきたところですが、同窓会員の皆様に、事業推進の中核となっていたただけです。ようお願ひ申し上げます。

最後に、同窓会の皆様が母校を暖かく見守ってくださいますことに深く感謝いたしますとともに、各位のますますのご発展とご健康を心から祈念申し上げます。

同期会便り

釧中30・31期同期会

札幌地区在住

鍵谷信郎 記

期は分かれても同期

歌に「血肉分けたる仲ではないが、何故か気が合うて別れられぬ」とあるがそのとおりで、同期の絆は生涯切れることはない。我が釧中三十・三十一期生も、毎年欠かさず全国同期会を開催してきた実績が示すように、その結末度は他の期に勝るとも劣ることはないと思自負している。この平成十一年度も、秋たけなわの十月十三日(例小樽市朝里川温泉に、全国各地から六十二名(含同伴夫人十五人)が参集、大いに旧交を温めた。早生まれの者がまだ六十代だとアピールするものの、数えて言えば古稀を迎え古稀を超えた面々ばかり。しかし、お互い会えば、たちまちにきび顔のあの時代に戻れるのだから、嬉しいことだ。それにしても、物故者八十二名とは厳しい数字である。確か二十五名が共に釧中の門をくぐったはずだがと、一同肅然たる思いで黙祷、しばし亡き友を偲んだ次第。この後早速杯

を酌み交わして深更まで談笑、明けて十四日は余市、積丹半島方面へのバス観光に繰り出すことになる。さて、釧中(30・31)期同期会なる言い方は、いかにも一学年違いの者達が合同で同期会をやっているかのように聞こえなくもないが、さにあらず、両期はまぎれもない同期、同学年なのである。とはいっても、お若い方々のためには、これは少々解説が必要かもしれない。三十期生も三十一期生も第二次大戦さ中の昭和十七年四月釧中(略さず)に言えば北海道庁立釧路中学校)に入学している。旧制中学校の修業年限は五年だったから、平時なら五年後には揃って卒業して全員三十期生を名乗っていたに違いない。だが、戦争が日に日に苛烈化を加える中で、中学生にも卒業一年繰り上げの号令が発せられ、昭和二十年三月には一期上の四年生二十九期生が五年生二十八期生と同時に卒業する事態となる。戦争はこの五か月後に終わり、修業年限は元に戻るようになるが、年限を短縮する戦時特例についても次の年に限って適用

可とされたため、我々の期は昭和二十一年三月の四年卒業者とその翌年の五年卒業者と二分されている。前者を三十期生、後者を三十一期生と称するようになるわけで、二つの期から成る同期会などまずは珍しく、これが最初で最後とも言えるのではないか。

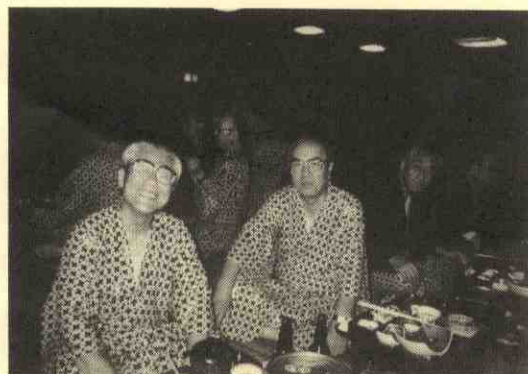
懐旧談に花咲くのは勿論、世相を反映しての教育論(含家庭教育、社会教育)あり、格調高い音楽論ありで夜は更けゆくが、久々の睡眠不足も何のその。一年一回のこの集いは愉快で楽しい。医者、代議士、社長業など、若い者にはまだ負けんとばかり、なお現役で頑張っている者も少なくないが、多くは既に第一線を退いてはいる。しかし、気力、体力の劣えは無く、ボランティア等を通じ、まだまだ世の為人の為役に立てるぞと意気盛んなところを見せているのである。全国同期会の当番は、平成十一年度の札幌地区に続いて明年度は故郷釧路地区、そして次が東京方面の本州ブロックと回り番で当たり、開催地を移動させながらみんなが集まることになるが、是非とも元気な顔をその都度見せて欲しいと願っている。



池端清一前代議士の乾杯



宿泊先玄関前で(朝里川温泉)



石井札幌代表



同行夫人一同

当番期紹介

湖陵二十八期 高木 亨

大腿四頭筋に力をこめ、重心を下げていく。陳家太極拳にも似たゆったりとした動きをもってしゃがみこむ。難しいのはこれからだ。腹筋に力をこめる。恐怖が待ち受ける一瞬へめがけ、集中力を高める。開放!

じゃぼん。
肉体から離れた物体が奈落の底に落ちた。
ひゅん。

暗殺者のように音もなくおつりが飛びあがってくる。とっさに臀部を持ち上げる。からくも、便つぼからの使者を虚空にかわす。しゃぼん。幾百人もの排泄物が複雑に混合した黄金の一滴がむなしく落ちた。

「ふう……」
深い安堵のため息が、狭い個室に響く。

ときどき、安堵のため息ではなく、悲鳴が聞こえることもあったが……

釧路湖陵高校の体育館のトイレは悲惨だった。汲み取り式だった

のはやむをえないとしても、雨などふると水かさが増す。大きな方をしていて油断するとえらいことになってしまふ。

古かったのはトイレばかりでない。

湖陵第二十八期の学生生活のスタートは、天井がやたら高く、冬になればストーブの回りに固まらぬと凍死の恐れさえありそうな一階で始まった。

先生たちは一風変わっていた。

全身剛毛に包まれた体育の先生やら、怪我をしたとき車椅子で授業にきたという伝説をもつ英語の先生、授業になるとたんに瞑目しトリップしたかのように語り出す歴史の先生、UFOから途中下車してきたような巨眼の生物の先生、落語家に似ているくせに授業は少しも笑えなかった国語の先生……

一方生徒であった当時の自分たちはおとなしい少年たちだったように思える。

バスを乗っ取って人を刺した奴

が出たわけでもない。野球部だった金属バットで親を殴り殺した奴はいなかった。祭りのときに警官をぶんなぐるのが趣味、なんて奴は皆無である。

娯楽と言えば「テレビ、本、映画」に限られていた。「パソコン、ゲーム、ビデオ」は後年のもの。どのどかな時間が大河のようにゆったりと流れていた。

誰が悪いわけでもないが、自分たちも当時の先生がたと同じ年代になってしまった。家族やら職場やらのもろもろのしがらみが、キングコングを拘束した鎖のように全身にからみついていく。

やがて自分たちの子どもたちが、あのどかな時間を迎える。キングコング用の鎖をかけるのはまだ早い。見守るのは我々である。あの、ユニークだった先生たちのように。

さて、今年の同窓会も重い鎖を解き放ち、気分は一気に十代に戻って皆で楽しく大いに飲み語りましょう。



奥田達也(湖陵一期)の
誠愛勇から



伊藤正司の巻
(釧中27期)

たぐらいぜいたくはなかった。物不足の、貧しい時代、そのときの幸せをしみじみ思い出す。

「蕎麦つてものは茹でて、上げて、冷たい水で洗って、さっと盛り。盛られた蕎麦二、三本を箸で掴んで汁もつけずに食べてみる……」

などという江戸っ子の話を聞く。それ程に日本人に好まれるそば。今年の六月二十二日の釧路新聞

伊藤正司が連載する「そば風信」の十二に「今は亡き皇太后様をお偲び申しあげつつ、昭和を生きた私にとってこのご逝去の一報は真

とくに私共にとっては、昭和二十九年八月兩陛下釧路ご巡幸の節は、父の手になる当店の名物「蘭切りそば」を天皇陛下共々にお召し戴きとくに天皇陛下にはお代わりまでお召し戴いたことは長年そ

ば専門で生きて来た店はもちろんのこと調理をあげかつた亡父(徳治)をはじめ私共一家の感激と光栄は末代の榮譽として忘れること

のできないこととあります。竹老園東家総本店の名誉はひとり竹老園のみならず、釧路市民の誇りであり、著名人の多くの賞賛

天皇の「お代わり」に感激

頼られる・竹老園社長

の昭和の終焉を思わせる悲しいお知らせでありました」と次のように記している。

先週十六日夕刻、皇太后良子さまがご逝去されました。一九〇三年のお生まれで九十七歳のご生涯

は昭和天皇の皇后として激動の昭和をいつもお優しい笑顔で過ごされ、昭和元年(大正十五年)生まれの昭和人の私にとってはまさに

国の母・昭和の母と呼ぶにふさわしいお方であったと思われてなりません。

の色紙を見ても、もつともとうなづくばかりである。

二十七期生は私ら釧中三十二期が入学したときの最上級生で一番の兄貴であった。

まじめで優秀な人柄の上級生として慕うにふさわしい副級長さんだった伊藤正司が、私らが憧れる難関の陸軍士官学校へ進んだ。

そのりりしい軍服姿の兄貴を誇りとして今も忘れられない。私が甘えてダダをこね、困らせるのもそんな昔があり、どんな我

儘も許してくれ、苦情をいっても黙って聞いてくれるからである。

拙著の「釧中物語」が発売の昭和五十二年に二十七期生の不買運動にひっかかったのをなじったのも、そんな我儘のひとつ。

そのころ二十七期生は働き盛りであった。中村隆、渡辺源司、徳永滋男、柴田久美、高橋修二、高橋幸夫、三宅健治、久本満、平野八代、中谷俊武、八町憲一、岩堀

等、坂本一、人見和雄、瀬村哲雄、奥田日出造、梅山源悦、菅原式也、坂本茂、佐川昭と釧路を代表する人々ばかり。販売の協力を一番に願う状況にあり、その同期生が悲鳴をあげるに足る理由があった。

(それから二十二年へた昨年、本州から集った二十七期生が纏めて同誌を買ってくれて、わだかまりは解消した)

釧路市の教育委員長をつとめ、本行寺の壇家総代としては改築建

立(こんりゅう)を責任もってなしとげた。春採湖の会会長としてもその環境保全・保護対策に努めている。頼られ、相談される人。



霧の街釧路で100年ひと筋に育てたそばの味



竹老園
東家総本店

釧路市柏木町3の19 ☎41-6291
営業時間/午前11時~午後6時
定休日/毎週火曜日



社会人となった今

戸田 雄亮

平成十二年三月卒
(湖陵五十二期)

高校を卒業してまだ半年にも満たない私を社会人と呼べるかどうかわかりませんが、とりあえず社会に出た気持ち等を書きたいと思っています。

私の高校生活は決して真面目とか、勉学に励むとか、読書が好きだとは言えない生徒だったと思います。しかしそんな私が今となれば社会人四ヶ月を過ぎようとしています。今までは周りが同じ年齢の人達ばかりで気に入った仲間達で遊ぶという生活を送っていました。確かに大学生やその頃の友達と話したりすると、高校生に戻りたいとか、大学に行けばよかったかなとか思うこともありすが、やっぱり就職してよかったなあと思ひ直しています。それは私がこの仕事に就くことが夢だったからです。今、仕事は、毎日がとても新鮮で、内容が濃く充実した日々を過ごさせていただいています。しかしその日々の中で一番感じたのが「責任」という言葉の重大さです。私一人の犯したミスが、同じ隊員、要救助者の命を失わせるという可能性があるわけで、常に

緊張感を持ち、自分の行動には責任を持っていたいと思います。

私の職場の先輩方は、皆さんとてもいい人達ばかりで右も左も分からない私に、丁寧に仕事を教えてくれます。時には厳しくもしてくれ、とても感謝しています。又、この職場で新しい目標を見つけることが出来ました。このことについても感謝したいです。私は一日も早く立派な消防士になり、隊員みんなから頼られ、信頼される消防士になりたいです。人に迷惑をかけず、人に信頼される社会人になります。そして次に新しく入ってくる新任者に教えることができたらいいなと思っています。



社会人 1年生

社会人になって

尾田 美和子

平成十二年三月卒
(湖陵五十二期)

ちょうど一年前頃には就職するために頑張っていました。そして今、私が無事に職に就き、自分でお金を稼いでいるということに驚きを感じます。一年間でこれ程変わってしまうということは予想出来ませんでした。

働き始めてから三ヶ月、だいぶ仕事や職場の雰囲気にも慣れ、一人で仕事が出来る様になってきました。私が担当しているのは主に会計です。昔から数学は好きなので会計という仕事は合っていると思うのですが、一円でも間違うとおかしくなってしまうので、とても神経を使います。だから、今の私の目標は早く正確に仕事をすることです。

私が入社する前に思っていたことは、厳しい上司がいないかとか、仕事が大変じゃないかとかいうことでした。実際に働いてみるとその様なことは一切なく、皆やさしくていい人達ばかりで、仕事も大変なのですが思っていたほどではなかったのが安心できました。

ふと、大学に行っていたら私は何をしていただろうと考える時が

あります。たしかに大学に行けば自分の学びたい勉強も出来るだろうし、友達も増えると思います。でも、私は高校二年生の時に出した「社会に出る」という決断は間違っていないかと思ひます。きっと大学に行つたとしても、なんの目標も持たずならだらとした生活をしていただろうと思うからです。

私は今の生活で満足しているので就職することを選んで本当によかったと思ひています。まだ半年も経っていないので覚える事はたくさんありますが、マイペースで頑張っていこうと思ひています。そして仕事をするのが楽しくなればいいです。



事務局だより

夏の涼しい釧路地方にもやっと暖かさを感じられる今日此の頃ですが、同窓会会員の皆様におかれましてはご健勝にて毎日ご活躍のこととご拝察申し上げます。また常日頃から同窓会に対するご支援・ご協力を賜わり厚くお礼を申し上げます。次第でございます。

さて、平成十二年を迎え、各支部の総会も次々に開催され、三月には十勝支部、四月には東京支部そして六月には札幌支部とそれぞれ盛会に終了されたとお祝いかけてつた会長・副会長より報告を頂いております。総会を催された各支部の幹事の皆様本当にご苦勞様でした。当親会も八月十三日の総会開催に向けて、十八期・二十八期、そして三十八期の当番幹事の皆様が総会並びに懇親会の成功に向けて一生懸命頑張る準備を進めております。本当に感謝の気持ちでいっぱいでございます。

ところで最近の同窓会の役員会は必ず同窓会館を使用して居ります。おかしな話ですが、使用しますと何となく親近感が伝わって参ります。外からながめるだけでなく実際に中に入ると又別の感情がわきでるものと思われまます。湖陵高校の事務室にお願いするといろいろと使用についてご配慮して下

さいますし、勿論夜でも使用することが出来ます。クラス会、あるいはサークルの仲間などは非ご利用して頂きたいと思ひます。確かにいろいろなことがありましたが、

同窓会館は立派に建ちました。まず使用して実感を味わって頂きたいと思ひます。またそのうえでいろいろなご意見を頂戴出来ますれば幸いです。

今年の総会も間近にせまっております同窓生皆さんで楽しいひとときを過ごして頂きたいと思ひます。次第であります。

編集後記

何事もなくミレニアムを迎え、もう立秋とは名のみ土用あけの葉月になり、年一回・A版になって三年目の刊行の時期になりました。

今39号も同窓会員のご協力で、五月三十日夜の編集委員会に始まり本日皆様にお届けすることができた事を一同と共に快哉を叫びたい。初号から携わったひとりとして明年の40号まで絶やさず刊行できることは慶びに堪えない。次号は特別スペースをとりたいと思っている。

今後とも一層のご協力とご理解を特にご投稿にもお力添えの程お願いする次第です。

(上岡 記)

くまざさ編集委員会

- | | |
|--------|-------|
| 同窓会会長 | 久本 甫 |
| 同窓会幹事長 | 佐藤 文昭 |
| 同窓会会計長 | 関口 政司 |
| 編集委員長 | 上岡 信明 |
| 編集委員 | 奥田 達也 |
| 〃 | 石川 和男 |



釧路のおみやげに！

しあわせをお菓子にのせて



熊手焼
せんべい

くまざさ



釧路市南大通2 ☎代41-2121